

フィールドサイエンスと医療政策 ー1930年代のハンセン病疫学の営みー

2013年2月12日（火） 18:00-20:00

日本のハンセン病政策上、戦前にひとつのエポックとなったのは1931年の「癩予防法」です。

それと同時期の1930年代に、日本のハンセン病医学は疫学の方法を取り入れ、フィールドに出て地域に生きる病者の姿をとらえようとし始めます。

今回はこの「ハンセン病疫学」の知見と政策のからみあいがどのようなものであったかを事例として、医学と医療政策の歴史についてお話ししてみたいと思います。（ゲストより）

ゲスト 廣川 和花（ひろかわ わか）氏

大阪大学 適塾記念センター 准教授

専門は、近代日本の医学史。ハンセン病などの疾病を対象に、医学・医療と病者の歴史について研究しています。また、医学にまつわる歴史資料の保存と公開について、アーカイブズ学の視点から考えています。

会場 大阪大学豊中キャンパス内
全学教育推進機構総合棟Ⅰ
(旧実践センター教育研究棟)
セミナー室2

定員 25名程度

*当日参加も可能です！

*お申し込みをいただいた方には、
前日にリマインダーをお送りします

持ち物 （おなががすく時間なので）
夕ご飯をご持参ください。

主催 科学コミュニケーション研究会 関西支部有志
水町 衣里（京都大学） 東島 仁（大阪大学）



お申し込みはコチラから → <http://bit.ly/XpcqwF>